



西畑屋遺跡2次

—浜松市 東区 有玉南町 西畑屋遺跡 2次発掘調査報告書—

Nishihataya Site

—The 2nd excavation report—

2008年9月

(財) 浜松市文化振興財団

Hamamatsu Cultural Foundation

西畑屋遺跡2次

NISHIHATAYA SITE

HAMAMATSU CULTURAL FOUNDATION

2008



下層遺構検出状況（南西から）






SD201 出土遺物

例 言

- 1 本書は浜松市東区有玉南町内で行われた西畑屋遺跡の発掘調査の報告である。調査は宅地造成工事に先立つ事前調査として実施した。
- 2 西畑屋遺跡は1997年～1998年に発掘調査が実施されている。この調査成果は、(財)浜松市文化振興財団1999『西畑屋遺跡1999』として報告書が刊行されている。この調査を1次調査とし、本書で報告する調査を2次調査とする。
- 3 当発掘調査は遠州鉄道株式会社の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施した。
- 4 発掘調査は安藤憲・鈴木一有・仲川美津保（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）が担当し、鈴井けい子・原田和子（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当非常勤職員）が補助した。
- 5 本書の執筆、編集は鈴木一有が担当した。
- 6 調査の記録、出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺構番号は、上層、中層、下層の検出層位ごとに付した。上層遺構は二桁番号、中層遺構は100番台、下層遺構は200番台である。
- 3 遺構の略記号は、以下の通りとする。
 - SD：溝、自然流路
 - SK：土抗
 - SX：大型土抗、土器集積
 - SP：小穴
- 4 遺物番号は層位にかかわらずに連番を付した。
- 5 本書で報告する土器の断面と種別との関係は以下の通りとする。
 -  土師器・土師質土器
 -  須恵器
 -  灰釉陶器・山茶碗・施釉陶器
- 6 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。
 - (財) 浜松市文化協会→浜文協
 - (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静岡研
- 7 本書の作成にあたり、以下の方々や機関の協力、教示を得た。
 - 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター、大谷宏治、村上恭通

西畑屋遺跡2次

目 次

卷頭図版
例 言
凡 例

第1章 序 論	1
1 調査にいたる経緯	1
2 調査の方法と経過	3
第2章 調査成果	6
1 上層遺構	6
2 中層遺構	15
3 下層遺構	19
第3章 総 括	25

図 版
報告書抄録

図版目次

巻頭図版

- 1 下層遺構検出状況（南西から）
- 2 SD201 出土遺物

図 版

- 1 上層遺構検出状況（南西から）
- 2 1 上層遺構（北西から）
 - 2 上層遺構（北東から）
- 3 1 SE01 上面（北東から）
 - 2 SE01 断面（西から）
 - 3 SE01 最下層（西から）
- 4 1 SP13 遺物出土状況（南西から）
 - 2 SK04 遺物出土状況（北東から）
 - 3 SK02 遺物出土状況（西から）
 - 4 SK05 遺物出土状況（南から）
- 5 1 中層遺構（南西から）
 - 2 SK102・103 遺物出土状況（南東から）
 - 3 SK106 遺物出土状況（南東から）
- 6 下層遺構 SD201（南西から）
- 7 1 SD201 遺物出土状況（南西から）
 - 2 SD201 遺物出土状況（東から）
 - 3 SD201 遺物出土状況（北東から）
- 8 1 SD201 発泡土塊出土状況（南から）
 - 2 SD201 発泡土塊出土状況（南東から）
 - 3 SD202 遺物出土状況（西から）
- 9 SD201 主要出土遺物
- 10 1 上層遺構出土遺物
 - 2 中層遺構出土遺物
- 11 下層遺構出土遺物（1）
- 12 下層遺構出土遺物（2）

挿図目次

- Fig.1 西畑屋遺跡の位置 ……………1
- Fig.2 西畑屋遺跡周辺の遺跡の分布 ……2
- Fig.3 試掘調査出土土器 ……………3
- Fig.4 本調査風景 ……………3
- Fig.5 発掘調査地点の位置 ……………4
- Fig.6 調査対象地と基本層位 ……………5
- Fig.7 SE01 下部検出状況 ……………6
- Fig.8 上層遺構実測図 ……………7
- Fig.9 SE01 実測図 ……………8
- Fig.10 上層遺構詳細実測図 ……………10
- Fig.11 SE01 出土遺物 ……………11
- Fig.12 上層遺構出土遺物 ……………13
- Fig.13 SX02・03 出土遺物 ……………14
- Fig.14 中層遺構検出作業 ……………15
- Fig.15 中層遺構測量風景 ……………15
- Fig.16 中層遺構実測図 ……………16
- Fig.17 中層遺構詳細実測図 ……………17
- Fig.18 中層遺構出土遺物 ……………18
- Fig.19 下層遺構実測図 ……………20
- Fig.20 SD201 実測図 ……………21
- Fig.21 SD201 出土発泡土塊 ……………22
- Fig.22 SD201 出土遺物 ……………23
- Fig.23 下層遺構出土遺物 ……………24

第1章 序論

1 調査にいたる経緯

浜松市東区に位置する積志地区は、市内でも歴史遺産が豊富な地域である。遺跡に限っても、半田山や有玉台をはじめとする三方原台地の東縁に後期群集墳が濃密に分布し、古墳群から眼下に望む沖積平野上にも、数多くの集落遺跡が埋没している (Fig.2)。西畑屋遺跡は、7世紀後半～8世紀前半を中心に、土馬をはじめとする祭祀用土製模造品が豊富に出土する遺跡として著名である。既に1950年代の終わり頃、採集品が浜松市教育委員会に持ち込まれ、遺跡の存在が周知されるようになっていた。遺跡の存在を強く印象づけたのは、1997年～1998年に実施された1次調査の成果である。1次調査では、都市計画道路 (有玉初生線) の建設に伴い、約3,000㎡が調査され、河川跡から大量の土製模造品と土器が出土し、市民の関心を広く集めた (浜文協1999)。

2007年 (平成19年)、西畑屋遺跡1次調査地の北東100mの地点において、遠州鉄道株式会社によって宅地造成工事が計画された。造成予定地は西畑屋遺跡の推定範囲内に相当し、遺跡が良好な状態で埋没している可能性が高いと判断できた。このため、浜松市教育委員会は2007年8月3日に試掘調査を実施し、当該地の土層堆積状態と、遺物の包含状況を明らかにした (Fig.3・6)。この結果を受け、遠州鉄道株式会社と浜松市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議し、開発予定地のうち、市道移管部分にあたる道路建設予定地に限り発掘調査を実施することを決定した。

発掘調査は、(財)浜松市文化振興財団が受託し、浜松市教育委員会 (浜松市生涯学習課文化財担当が補助執行) が調査指導にあたった。発掘調査は2007年11月14日～12月10日に実施した。調査面積は、240㎡である。



Fig.1 西畑屋遺跡の位置

西畑屋遺跡周辺の遺跡

1	西畑屋	古墳～古代	26	千人塚平C古墳群	古墳	51	別所東	古代
2	東畑屋	古墳～中世	27	千人塚平D古墳群	古墳	52	天王町村東	古代
3	舟岡山	弥生	28	千人塚古墳群	縄文	53	天王	弥生
4	染地	縄文～古代	29	千人塚	古墳中期	54	天王中野	弥生・古代
5	下蔵古墳群	古墳	30	宇藤坂ABC古墳群	古墳	55	下石田町村前	弥生・古代
6	下蔵	旧石器～中世	31	北平古墳群	古墳	56	橋爪	中世
7	半田山G古墳群	古墳	32	神明平	古代	57	万船	中世
8	半田山田古墳群	古墳	33	神明平古墳群	古墳	58	上大瀬	中世
9	半田山A古墳群	古墳	34	欠下城跡	中世	59	預国	古墳～古代
10	半田山CDEF古墳群	古墳	35	欠下平	縄文～古代	60	八幡西	中世
11	半田山I	縄文～中世	36	蘇町古墳群	古墳	61	八幡南	古墳～中世
12	半田山II	縄文～弥生	37	一本杉古墳群	古墳	62	軽子森古墳	古墳
13	半田山B古墳群	古墳	38	幸古墳	古墳	63	服織神社境内	古代
14	半田山、	縄文	39	四ツ池古墳群	古墳	64	御殿山	中世
15	有玉古窯跡	古墳	40	大塚古墳群	古墳	65	大通古墳	古代
16	瓦屋西ABD古墳群	弥生～古墳	41	住吉A古墳群	古墳	66	宮前	古代・中世
17	瓦屋西I	縄文～弥生	42	阿弥陀	古代	67	笠井町下組	古墳～中世
18	瓦屋西	弥生	43	中田北	古代	68	笠井西浦	古墳～近代
19	瓦屋西II	縄文・弥生・近代	44	中田東	古代	69	笠井町広野	古代
20	地蔵平	縄文	45	上新屋	古代	70	笠井若林	古墳～中世
21	地蔵平AB古墳群	古墳	46	箕輪	古代	71	八ッ面	古墳・中世
22	下の谷古墳群	古墳	47	田見合	弥生	72	平松	古墳～古代
23	千人塚平	縄文・弥生	48	別所前	古墳	73	社口	古墳・中世
24	千人塚平A古墳群	古墳	49	西脇前	古代	74	茶ノ木田	古代
25	千人塚平B古墳群	古墳	50	市野	古墳・古代	75	恒武道路群	古墳～中世



Fig.2 西畑屋遺跡周辺の遺跡の分布

2 調査の方法と経過

調査地区の設定 西畑屋遺跡2次調査は、開発予定地の道路建設部分に限定して実施した。調査区は、国家座標の方眼に整合する方向にないことから、調査区の長軸上に任意の座標系を設け、基準点の計測値をもとに最終的に国家座標上に合成した。

また、造成工事の関係上、排土用地の確保が困難であり、調査は東側と西側の2箇所に分離して実施した。調査区の中央部では、大規模な井戸（SE01）が検出され、結果的にはSE01を境界に、東西に分けて調査を実施することになった。

調査方法 現地は、厚さ0.3～0.5mにわたり、盛土が施されていた。このため、調査にあたっては、バックホーを用いて盛土と旧表土（水田耕作土、基本層位1・2層）を撤去し、遺構の検出に努めた。表土掘削後は人力において、遺構検出、精査を実施した。また、中層、下層遺構の検出に至るまでの包含層の除去には、バックホーを用いた。

調査経過 今回の調査は、当初、試掘調査の結果を受けて、7世紀から8世紀の遺構面（後述する上層遺構）の調査に主眼をおいて実施した。しかし、調査を進めるにしたがい、下層に5世紀後葉（古墳時代中期）の遺構群、4世紀中葉（古墳時代前期）の遺構群を確認するにおよび、結果的に3面にわたる調査を実施した。

整理作業 報告書の作成作業は、現地調査終了後から2008年9月まで、浜松市埋蔵文化財調査事務所において行った。

調査参加者

現地調査 池谷力男・石山勝弘・湊 保代・辻 和子・倉田たき子・金原佳子

整理作業 北野恵子・斉藤晶子・鈴井けい子・田辺磯子・中村玲子・原田和子・林 至美・峯野洋子・森下朋子



Fig.3 試掘調査出土土器



Fig.4 本調査風景



Fig.5 発掘調査地点の位置

基本層位と遺構検出面 今回、検出した遺構群は、比較的厚い堆積層で覆われている。報告で示す通り、3面にわたり発掘調査を実施した。上位の遺構群から順に、上層遺構、中層遺構、下層遺構と呼称する。

上層遺構は、7世紀から8世紀前半にかけての遺構群を中心に、一部、15世紀～16世紀の遺構を含む。遺構検出面は、基本層位4層もしくは5層の上面である。中層の遺構は、より上位の層位（基本層位3層上面）で検出が可能であったが、下層にある古代の遺構と同一の面で確認した。

中層遺構は、5世紀後葉の土抗を中心とした遺構群である。遺構検出面は、基本層位6層の上面である。調査対象地の西側は、遺構密度が少なく、調査を実施していない。

下層遺構は、4世紀中葉の溝（自然流路）を中心とした遺構群である。遺構検出面は、基本層位7層の上面である。溝以外には小規模な小穴が展開している。また、今回は詳細な調査を実施しなかったが、下層遺構群のさらに下位に3世紀から4世紀頃の水田が埋没している。下層の水田は、基本層位8層を耕作土としている。

西畑屋遺跡2次調査地区における基本層位

1層	灰褐色粘土	(盛土以前の水田耕作土)
2層	黒灰色粘土	(近現代の水田耕作土)
3層	青灰色粘土	(上面 中層遺構掘り込み面 7世紀から8世紀の土器を大量に含む)
4層	緑灰色粘土	(上面 上層遺構検出面 一部シルト質 調査対象地の北側にはみられない)
5層	黄褐色粘土	(上面 上層遺構検出面 一部シルト質 5世紀の土器を含む)
6層	明黄褐色粘土	(上面 中層遺構検出面 4世紀の土器を含む)
7層	淡黄褐色シルト	(上面 下層遺構検出面)
8層	青灰色粘土	(水田耕作土 3世紀から4世紀の土器を若干含む)
9層	灰色粘土	(粘性が強い 水平の薄い堆積が発達)
10層	灰色粘土	(粘性が強い 黒灰色を呈する部分がある 水平の薄い堆積が発達)

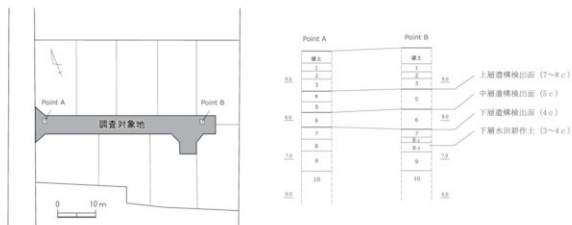


Fig.6 調査対象地と基本層位

第2章 調査成果

1 上層遺構

(1) 概要

上層遺構は、基本層位4層（緑灰色粘土層）もしくは5層（黄褐色粘土層）の上面、標高8.3mから8.4m付近において検出した。上層の検出面では、15世紀末葉～16世紀前半の井戸（SE01）1基を検出したほか、7世紀から8世紀の遺構を数多く確認した。また、7世紀後半から8世紀前半にかけての土器集積（SX02、03）を、基本層位3層（青灰色粘土層）中において検出した。1次調査で確認した大規模な土器集積と平行する段階の遺構群と捉えられる。

(2) 検出遺構

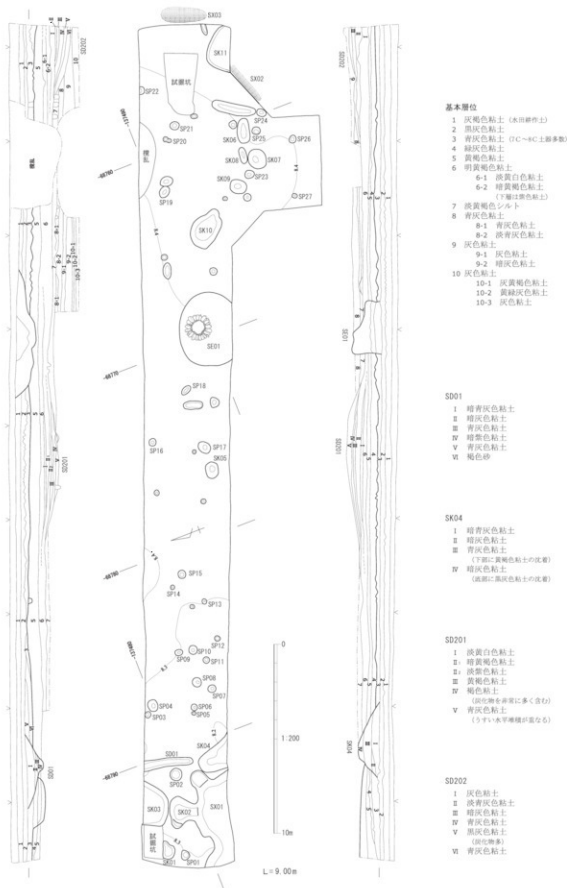
SE01 (Fig.9) SE01は、15世紀末葉～16世紀前半頃に構築された石組みの井戸である。調査区の中央やや東寄りで検出した。下部に桶を転用した枠木を用い、上部に円礫を積み上げた構造をもつ。検出面における掘方の規模は、東西3.9m、南北（確認面）2.8mである。遺構の掘り込み面は、基本層位3層（青灰色粘土層）の上面である。検出面からの深さは2.7m、掘削面からの深さは3.0mである。井戸の本体は、掘方の北側に偏っている。



Fig.7 SE01 下部検出状況

井戸の上部は、長径30～40cm、短径15～20cm程度の円礫が円形に積み上げられている。石組の内法の直径は、80cm程度である。石組みの間は土が詰め込まれている程度で、円礫どうしをつなぐための特別な造作はみられない。石組みは検出面から20程度確認できたが、各段を揃えたような様子は見られず、比較的乱雑に積まれている。

井戸の下部には、桶を転用した枠木が用いられている（Fig.7）。また、枠の外側には、自然木を比較的乱雑に加工した板材を井桁に組み、この木組みを固定するために多くの枝材が差し込まれている。井桁に組み込まれた外枠の上には、直接石組みが積み、最上段まで至る。下段の内側に用いられた木枠は、長さ55cm、幅10～20cm、厚さ2cm程度の板材で、合計12枚使用している。



基本層位

- 1 灰褐色粘土 (水田耕作土)
- 2 黒灰色粘土
- 3 青灰色粘土 (7C~8C土層多数)
- 4 緑灰色粘土
- 5 黄褐色粘土
- 6 明黄褐色粘土
 - 6-1 淡黄白色粘土
 - 6-2 暗黄褐色粘土 (7層土黄色粘土)
- 7 淡黄褐色シルト
- 8 青灰色粘土
 - 8-1 青灰色粘土
 - 8-2 淡青灰色粘土
- 9 灰色粘土
 - 9-1 灰色粘土
 - 9-2 暗灰色粘土
- 10 灰色粘土
 - 10-1 灰黄褐色粘土
 - 10-2 黄緑灰色粘土
 - 10-3 灰色粘土

SD01

- I 暗青灰色粘土
- II 暗灰色粘土
- III 青灰色粘土
- IV 暗褐色粘土
- V 青灰色粘土
- VI 褐色砂

SK04

- I 暗青灰色粘土
- II 暗灰色粘土
- III 青灰色粘土 (7層土黄褐色粘土の沈着)
- IV 暗灰色粘土 (底層に黒灰色粘土の沈着)

SD201

- I 淡黄白色粘土
- II 暗黄褐色粘土
- III 淡褐色粘土
- IV 黄褐色粘土
- V 褐色粘土 (灰化物を非常に多く含む) (5層土水平層位が異なる)

SD202

- I 灰色粘土
- II 淡青灰色粘土
- III 暗灰色粘土
- IV 青灰色粘土
- V 黒灰色粘土 (灰化物多)
- VI 青灰色粘土

Fig.8 上層構造実測図

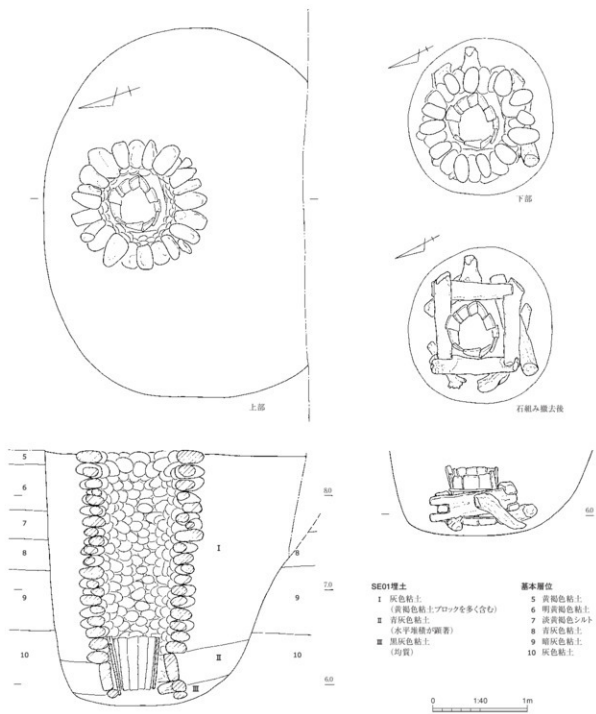


Fig9 SE01 実測図

SE01の最下段は、基本層位10層（灰色粘土層）までしか掘削されていない。10層は粘土層であり、現状では湧水が顕著な地層とはいえない。ただし、井戸が掘削された15～16世紀の段階では、この地層まで掘削すれば湧水がみられた可能性がある。

SE01からは、Fig.11-1～7に示す遺物が出土した。いずれも小破片であるが、時期にまともりがある。これらの小破片は、最下層の井戸枠が構築された層位から出土しており、遺構の構築時期を示すものと捉えられる。

SX01 (Fig.10) SX01は、調査区の西端において検出した7世紀の窪地である。SX01の埋土は、鉄分の沈着が多く、水分を多く含んでいた。湿地性の堆積と捉えられ、調査区の西側には低地が広がっていたと推定できる。また、遺構の西端において、焼土層が比較的、厚く広がっている箇所が確認できた。この焼土層は、Fig.10に示したⅡ層に相当する。湿地の岸辺で火を焚いた痕跡とみられる。

SX01からはFig.12.8~14に示す遺物が出土した。西畑屋遺跡1次調査で確認された土師器の把手付蓋といった特殊な遺物が含まれる点が注目できる。

SK02 (Fig.10) SK02は、SX01と接続する7世紀代の窪地である。埋土の特徴が一致し、SX01と接続することから、SX01と同一の遺構と捉えられる。SK02からはFig.12.15~19に示す遺物が出土した。

SK03 (Fig.8) SK03は、SK02の北側に位置する7世紀代の窪地である。埋土の特徴が一致することから、SX01・SK02と一連の遺構と捉えられる。西側に広がる湿地の岸辺は、比較的入り組んでいたと捉えられる。SK03からはFig.12.20・21に示す遺物が出土した。

SK04 (Fig.10) SK04は、SX01の東側に接する中世の土抗である。検出面における長辺は1.6m、短辺は1.3mである。遺構の掘削面は、基本層位3層の上面であり、SE01と共通する。

遺構の性格は不明ながら、SK04からは、木製椀 (Fig.12.23) や火鑽白 (Fig.12.24) といった木製遺物が出土した。遺構の時期を決定づける出土遺物に恵まれないが、遺構掘削面が15世紀末葉~16世紀前半の遺構であるSE01と共通すること、出土した木製椀 (Fig.12.23) が中世の特徴を有していることから、15世紀~16世紀頃の遺構と捉えられる。

SK05 (Fig.10) SK05は、調査区のはほぼ中央で検出した7世紀代の円形の土抗である。土抗の規模は、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.2mほどである。遺構の掘削面は4層の上面と捉えられる。SK05からはFig.12.25・26に示す遺物が出土した。

その他の遺構 上記の遺構以外にも、上層遺構検出面では、土抗 (SK)、小穴 (SP) を多く検出した。いずれも、遺構の掘削面は4層の上面と考えられ、7世紀を中心とする遺構群と捉えられる。これらの遺構から出土した遺物は小破片ばかりであるが、时期的なまとまりが認められる。図示できる遺物としては、Fig.12.27 (SP01出土)、Fig.12.28 (SP03出土)、Fig.12.29 (SP13出土)、Fig.12.30 (SP25出土)、Fig.12.31 (SP26出土) などがあげられる。

SX02・03 (Fig.8) 調査区の東側もしくは南東側の壁面において7世紀後半から8世前半にかけての土器集積を確認した。東端で確認した土器集積をSX03、南東端で確認した土器集積をSX02とする。これらの土器集積は、いずれも基本層位3層 (青灰色粘土層) 中に含まれている。

SX02・03ともに、遺存部分大きい個体が多く、完形に近い状態を保つ個体が多い。土器集積の範囲は不明瞭ながら、調査区外の東方もしくは南東方向に向かって広がっている。集積が形成された時期や、遺存状態の類似性を考えると、西畑屋遺跡1次調査で確認したような大規模な土器集積が展開している可能性も考えられる。

SX02からはFig.13に示す48~60が、SX03からはFig.13に示す61~67が出土した。遺存状態は良好で、完形に近い状態まで復元できるものが多い。

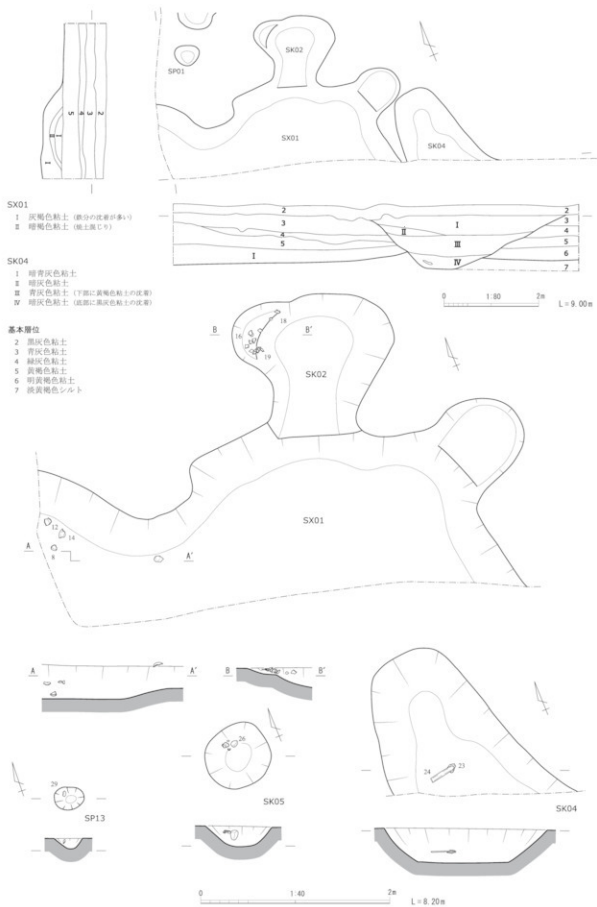


Fig.10 上層遺構詳細実測図

(3) 出土遺物

SE01出土遺物 (Fig.11) 1~7は、SE01から出土した遺物である。1~3は土師質土器の内耳鍋である。内耳の部分は確認できないが、形態的な特徴から、16世紀前半頃のものとして捉えられる。4は土師質土器の羽釜である。内髷型羽釜と呼ばれる形態で、15世紀後半~16世紀前半頃のものと考えられる。5・6は、施軸陶器のすり鉢である。瀬戸・美濃産とみられ、口縁端部の形態的特徴から、大窯第1段階~第2段階(15世紀末葉~16世紀前半)に相当する。7は施軸陶器の甕である。常滑産とみられ、肩部に押印文がみられる。

以上、SE01から出土した遺物が示す年代は、15世紀末葉~16世紀前半のもので、時期的にもまとまりが認められる。SE01の構築、使用年代を示すものと捉えられよう。

上層遺構出土遺物 (Fig.12) 上層遺構から出土した遺物をFig.12-8~31に示す。上層遺構から出土した遺物群は、中世の遺物と考えられる23・24を除き、7世紀中頃から後半にかけてのものが中心と捉えられる。

8~14は、SX01から出土した遺物である。8・9は須恵器の坏身、10・11は土師器の鉢、12は土師器の把手付蓋、13・14は土師器の甕である。

15~19は、SK02から出土した遺物である。15・16は土師器の坏もしくは鉢、17・18は土師器の甕、19は不明確ながら、土師器の小型甕の脚台部である可能性が考えられる。

20・21は、SK03から出土した遺物である。20は土師器の甕、21は土師器の脚台付甕の脚台部である。

22~24は、SK04から出土した遺物である。22は7世紀の土師器の甕であるが、混入品と捉えられる。23は、木製椀である。僅かながら、表面には黒漆が、内面には赤漆が塗布されている。遺存状態は極めて悪く、模様などの詳細はうかがえない。24は、木製の火鑽白である。曲物底板など、なんらかの製品を転用している可能性が高い。表面に擦痕が4箇所以上、認められる。23のような形

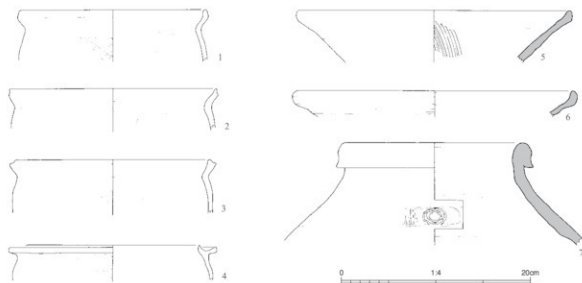


Fig.11 SE01 出土遺物

状の木製碗は、当地域では15世紀～16世紀頃に主に用いられていること、また、同じ層位で確認できる井戸SE01が15世紀末葉～16世紀前半頃の遺構であることなどから、23もおおむね同時期の遺物とみてよいだろう。また、共存した24の帰属時期も同様に捉えられる。

25～31は、この他の上層遺構から出土した遺物である。土師器の鉢もしくは甕であり、おおむね7世紀代の遺物とみられる。なお、26は石製の叩石である。

上層包含層出土遺物 (Fig.12) Fig.12-32～47に、上層遺構検出面（基本層位4層上面）より上位の層位から出土した遺物を示す。これらの遺物は、基本層位3層（青灰色粘土層）に含まれるものが多い。なお、基本層位3層に含まれる土器集積SX02・03の出土遺物は、別途紹介する。

32～34は、灰釉陶器の碗である。帰属時期は、10世紀頃と捉えられる。今回の調査では、この時期の遺構は確認できなかったが、調査地の周囲に同時期の遺構が存在する可能性がある。

35～42は、須恵器である。35・36は、8世紀前半の坏蓋、坏身、37・38は7世紀後葉の坏蓋、39は7世紀前葉の坏身である。これらの遺物群が示す時期幅は、上層遺構の主要な展開時期を示すといえるだろう。40、41は壺、42は臼である。

43～47は、土師器である。須恵器と同様に、7世紀から8世紀前半にかけての遺物群と捉えられる。44は皿、45は暗文がみられる坏、46・47は甕である。

SX02・03出土遺物 (Fig.13) SX02から出土した遺物をFig.13-48～60に示す。48～50は須恵器の坏蓋もしくは坏身である。51～60は土師器である。51は坏、52は台付皿、53～55は鉢、56は壺、57～60は甕である。いずれも、8世紀前半を中心とする遺物群と捉えられる。

SX03から出土した遺物をFig.13-61～67に示す。61・62は須恵器、63～67は土師器である。61は坏身、62は広口壺、63は大型の鉢、64は甕、65～67は台付甕である。いずれも7世紀後半を中心とする遺物群と捉えられる。

(4) 小 結

上層遺構は、中世と古代の両時期にわたる遺構がみられた。中世の遺構は、15世紀末葉～16世紀前半の井戸（SE01）の存在が特筆できる。SE01は、手が込んだ石組みの井戸で、近隣に同時期の居住域が埋没している可能性が高い。今回の調査地点の南方450mには、東畑屋遺跡がある。東畑屋遺跡では、2000年に実施された発掘調査によって、10～13世紀の集落が確認され、僅かながら、15世紀代の遺物も出土している（浜文協2001）。

古代の遺構は、7世紀中葉～8世紀前半の小穴、土抗、窪地である。また、調査区の東端で確認された土器集積（SX02・03）は、大規模な土器廃棄を伴う遺構群が調査地点の隣接地に展開していることを示唆している。これら古代の遺構は、西畑屋遺跡1次調査（浜文協1999）で確認した河川跡や土器集積と層位的にも時期的にも平行関係にあり、古代の遺構群が一定の広がりをもつことが明確になった。西畑屋遺跡においては、1次調査地点や今回調査した2次調査地点以外にも、古代の土器が比較的広範囲で採集されている。西畑屋遺跡においては、古代の遺構群が最も濃密に埋没していることが追認できたといえるだろう。

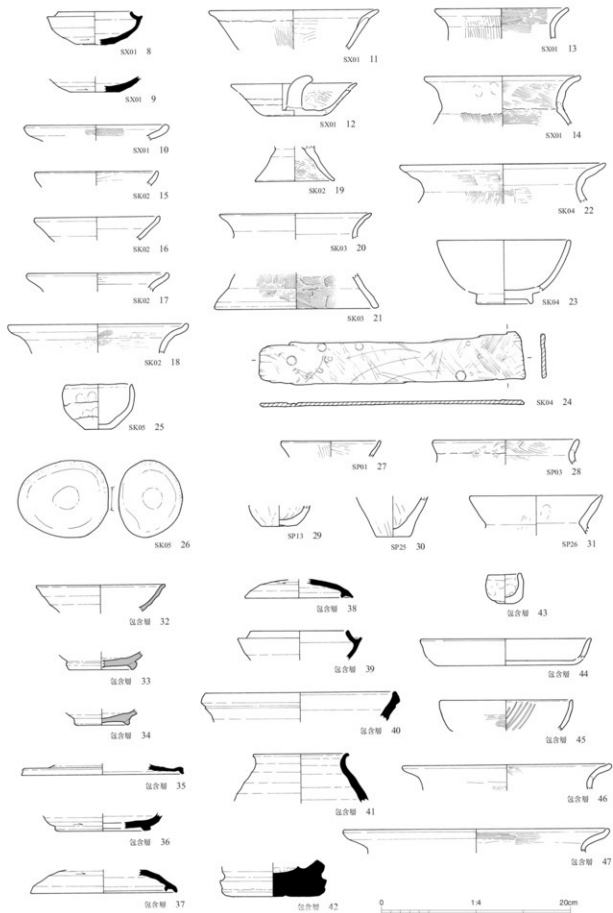


Fig.12 上層遺構出土遺物

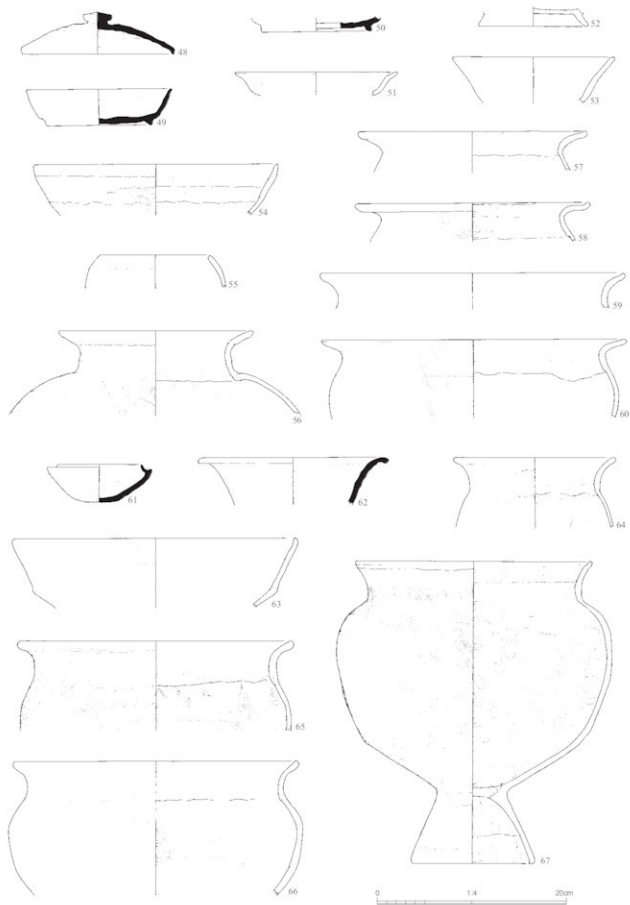


Fig.13 SX02・03 出土遺物
 (48~60: SX02 61~67: SX03)

2 中層遺構

(1) 概要

中層遺構は、基本層位6層（明黄褐色粘土層）の上面、標高8.0mから8.1m付近において検出した。5世紀後葉を中心とする遺構群である。当初、中層の検出面は明確に認識していなかったが、調査途中で、遺構検出が可能であることが判明し、急速、調査面に加えた。中層遺構の掘り込み面は、必ずしも明確ではないが、基本層位5層（黄褐色粘土層）の中にあることは確実である。

発掘調査は、工事の都合上、調査区を東側と西側の半分に分け、バックホーにより、排土を移動しながら実施した（Fig.14）。こうした事情から、中層遺構の検出作業は、調査区の中央に位置するSE01（上層遺構）を境界に、東側と西側に分離した。

SE01より西側の調査区では、5世紀代の遺物が全くみられず、遺構も認識できなかったことから、詳細な調査を実施していない。いっぽう、SE01より東側の調査区では、出土遺物も多く、遺構も多数が認識できた。調査区の西側にむかって遺構がとぎれる状況は確認できなかったが、SE01によって破壊された近辺を境界に、急激に遺構密度が低くなるものと想定できる。

なお、中層遺構の名称は、上層遺構や下層と区別するために100番台とした。

(2) 検出遺構

SK101（Fig.17） 調査実施地区の東半の北西隅において検出した浅い不定形土抗である。確認した部分での長軸は2.3m、短軸は1.2mである。Fig.18-68～71に示す遺物が出土した。

SK103（Fig.17） SK101に隣接して検出した浅い土抗である。西側のSK102と接続している。確認した部分での長軸は1.3m、短軸は0.9mである。Fig.18-72～74に示す遺物が出土した。遺存部分が多い土師器の台付甕（73）が横位で出土している。

その他の遺構 上記の遺構以外にも、中層遺構検出面では、不定形の遺構を多く検出した。遺構



Fig.14 中層遺構検出作業



Fig.15 中層遺構測量風景

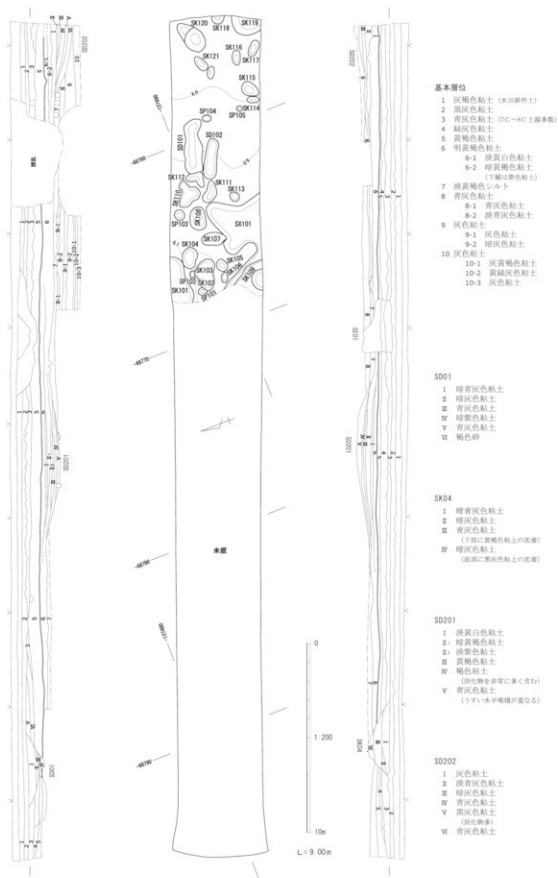


Fig.16 中層遺構実測図

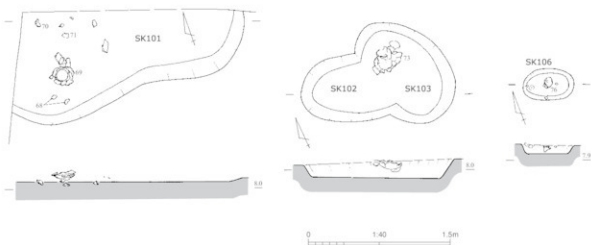


Fig.17 中層遺構詳細実測図

の性格は不明瞭ながら、比較的破片の大きな個体が出土し、所々に焼土や炭化物が集積している部分がみられることから、調査地は居住域に相当すると捉えられる。図示できる遺物を出土した遺構としては、SK105 (Fig.18-75が出土)、SK106 (Fig.18-76が出土)、SK107 (Fig.18-77が出土)、SX101 (Fig.18-78が出土)などがあげられる。

(3) 出土遺物

中層遺構出土遺物 (Fig.18) 中層遺構から出土した遺物をFig.18-68～78に示す。中層遺構から出土した遺物群は、5世紀後葉のものに限られる。限定的な時期から、中層遺構が形成された時間幅は比較的短かったことが分かる。

68～71は、SK101から出土した遺物である。いずれも土師器であり、68は碗、69は壺、70・71は甕である。

72～74は、SK103から出土した遺物である。72は土師器の碗、73は土師器の台付甕である。74は、砥石である。縦1.5cm、横1.0cm、長さ6.5cmほどの細長い直方体の一辺に著しい擦痕がみられる。

75～78は、この他の中層遺構から出土した遺物である。75はSK105から出土した須恵器の甕もしくは壺である。76～78いずれも土師器の高坏である。76はSK106から、77はSK107から、78はSX101から出土した。

中層包含層出土遺物 (Fig.18) Fig.18-79～85に、基本層位5層(黄褐色粘土層)から出土した遺物を示す。これらの遺物も、すべて5世紀後葉のもので、中層で検出した遺構群と同時期のものである。

79～82は、土師器の高坏、83・84は土師器の碗、85は土師器の壺である。

(4) 小 結

中層遺構は、5世紀後葉の短期間に形成されている。検出した遺構群の性格は、不明瞭ながら、

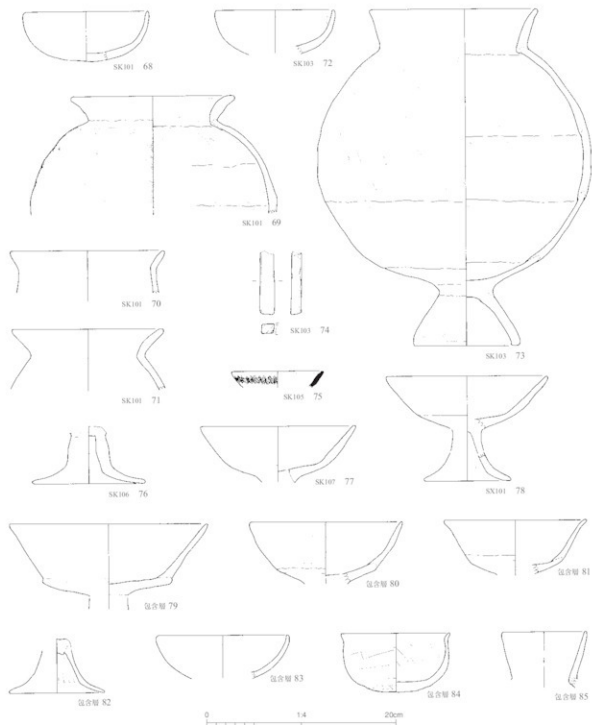


Fig.18 中層遺構出土遺物

出土する遺物には、遺存状態が良好なものが含まれ、遺構の中には焼土や炭化物が含まれるものが見られることから、調査を実施した範囲は居住域であった可能性がある。

西畑屋遺跡1次調査では、7世紀より前に遡る段階の遺物や遺構は確認できていない。中層遺構の調査によって、西畑屋遺跡において5世紀代の集落が存在することが明確になった。この時期の集落の広がり、不明確であるが、今回の調査地点を含み、周辺にある程度広がりをもっていた可能性がある。

3 下層遺構

(1) 概要

下層遺構は、基本層位7層（淡黄褐色シルト層）の上面、標高7.5mから7.8m付近において検出した。4世紀中葉の小規模な自然流路SD201を中心とする遺構群である。下層遺構の認識は、試掘調査において明確ではなかったが、上層遺構の調査後に掘削した深堀によって、Fig.22-100・104に示す遺物が出土するに及び、調査対象地の全域に4世紀代の遺構が存在していることが明確になった。

下層において検出した遺構は、溝、小穴である。中心的な遺構であるSD201は、調査区のほぼ中央を南北に貫流している。SD201の周囲には、数多くの小穴がみられる。また、調査区の東端においても、SD201と似た落ち込みが認められた。この落ち込みは、溝である確証はないが、調査では便宜的にSD201と同じような自然流路と捉え、SD202とした。

下層遺構の掘り込み面は、基本層位7層（淡黄褐色シルト層）の上面と捉えられる。なお、下層遺構の名称は、上層や中層と区別するために200番台とした。

(2) 検出遺構

SD201 (Fig.20) SD201は、4世紀中葉頃に形成された自然流路と考えられる。流れの方向はほぼ南北であり、東西の幅は7.0m、深さは0.8mである。流路には水平堆積が比較的良好に認められる。SD201の埋土は、溝の外側に至ると分層が困難になり、基本層位6層に収斂する。

SD201の底面には、4世紀中葉頃の土師器が比較的まとまって出土した (Fig.22-86～104)。これらの遺物は比較的、遺存部分が大きく、完形に復元できるものが多い。SD201の埋土には炭化物が堆積する部分が多く認められ、北東の斜面においては厚い焼土層がみられた。焼土には発泡している部分が多くみられ、強い熱を受けていたことが分かる。発泡状態が確認できる焼土は、表面が堅緻で、外見上は鉄滓に類似している。しかし、詳細に観察すると、金属的な成分は認められず被熱した粘土であることが判明する。

SD201からは、Fig.22-86～104に示す遺物が出土した。遺存部分が大きく、完形に復元できる個体も多い。層位的な乱れも認められないことから、一括性が高い遺物群と捉えてよいだろう。これらの土器は、4世紀中葉に位置づけられる。

SD202 (Fig.19) SD202は、4世紀中葉頃に形成された自然流路もしくは、低地と考えられる。調査区の東端において検出した。出土遺物は極めて少ないが、Fig.23-105に示す遺物が出土した。

水田層 下層遺構検出面より下位の地層において、水田の造営面を確認した。調査上の制約から、下層遺構検出面より下位の地層の確認は、調査対象地の北西側に設定したトレンチ内にとどまったが、水田耕作層の存在をうかがうことができた。水田耕作層は、基本層位8層（青灰色粘土層）が相当し、層位の擾乱が顕著に確認できる。とくに基本層位8-2層（淡青灰色粘土層）には、畦畔の可能性がみられる高まりが土層断面から確認できた。8-2層からFig.23-106に示す遺物が出土したこ

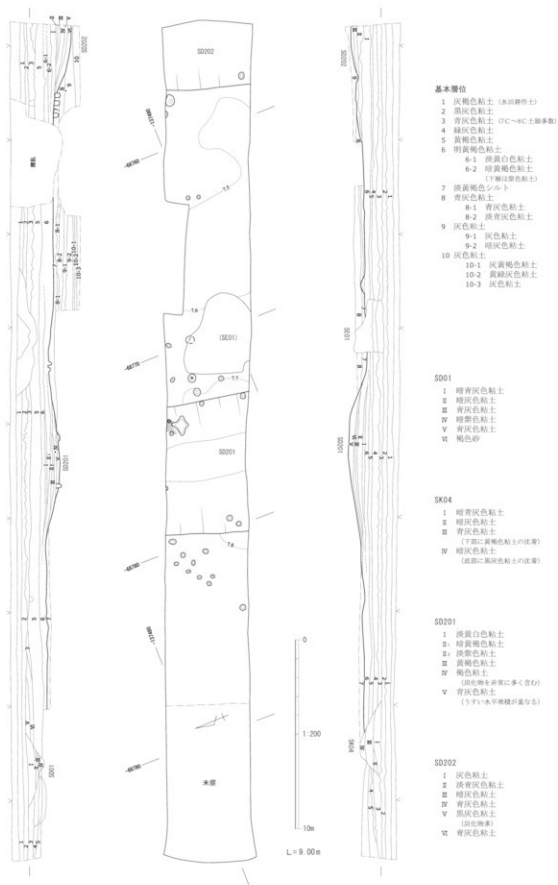


Fig.19 下層遺構実測図

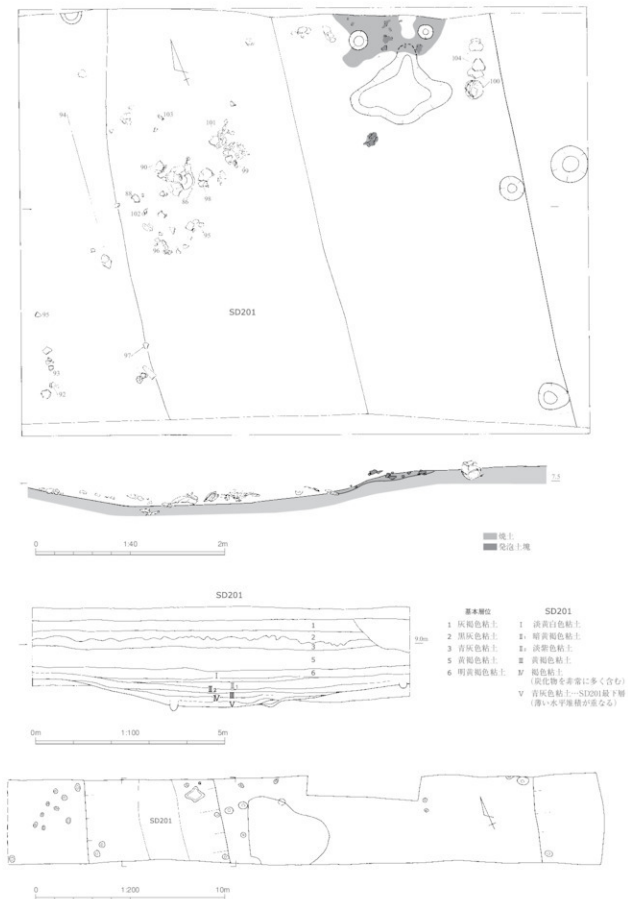


Fig.20 SD201 実測図

とから、最下層で確認した水田の造営時期は、3～4世紀頃である可能性が考えられる。

(3) 出土遺物

SD201出土遺物 (Fig.22) SD201からは、後述する土器の他に、Fig.21に示すような、発泡した土の塊が出土した。これらの塊は、赤焼けて土器のような状態を呈し、その一部は、青黒く焼きしまっている。焼きしまった部分は、発泡して堅くなっており、外見上は、鉄滓によく似ている。ただし、これらの発泡した塊には金属起源の成分が全くみられないことから、土が高温で焼けて、一部が発泡したものと判断した。SD201内において、非常に高温状態で土が熱せられたことを示している。SD201には、この他にも比較的薄い焼土層や、炭化物の集積が散見できた。SD201において、広い範囲で火が燃えたことを示しているだろう。

86～104は、SD201から出土した遺物である。いずれも古墳時代前期末葉の土師器で、4世紀中葉頃のものと考えられる。

86は、広口壺である。口縁端部が僅かに折り返されている。外面および、口縁内面には、細かなヨコミガキが施されている。87～89は直口壺である。87や89には、細かなヨコミガキがみられるが、88は口縁端部のヨコナデの痕跡が明確で、ミガキはみられない。

90は、小型丸底鉢である。表面は摩滅のため、細かな調整技法がうかがえないが、精製した胎土をもつことから、精緻なヨコミガキが施されていた可能性が高い。91は小型の鉢である。外面に強いイタナデ調整を施した後、下部と底部にケズリが施されている。



Fig.21 SD201 出土発泡土塊

92・93は、高坏の坏部と考えられる。双方ともにやや粗いミガキが施されている。坏部の直径が比較的小さく、かつ直立気味であることから、屈折脚高坏である可能性が高い。94～96は、有稜高坏である。94・96ともに、坏部と脚部の接合部は細く、華奢な印象を受ける。高坏脚部である96にはスカシ孔がみられない。97は脚部であるが、詳細な器種は不明である。脚付の壺もしくは鉢などの一部である可能性が考えられる。

98～103はS字状口縁台付甕（以下S字甕と略す）である。98・99の口縁端部上面には面取りが施されているいっぽうで、100・101は口縁端部がやや厚くされ、外傾する面がみられる。98～101のすべてにおいて、口縁屈曲部外面の沈線がみられるが、口縁屈曲部内面の調整は、99・100にしか顕

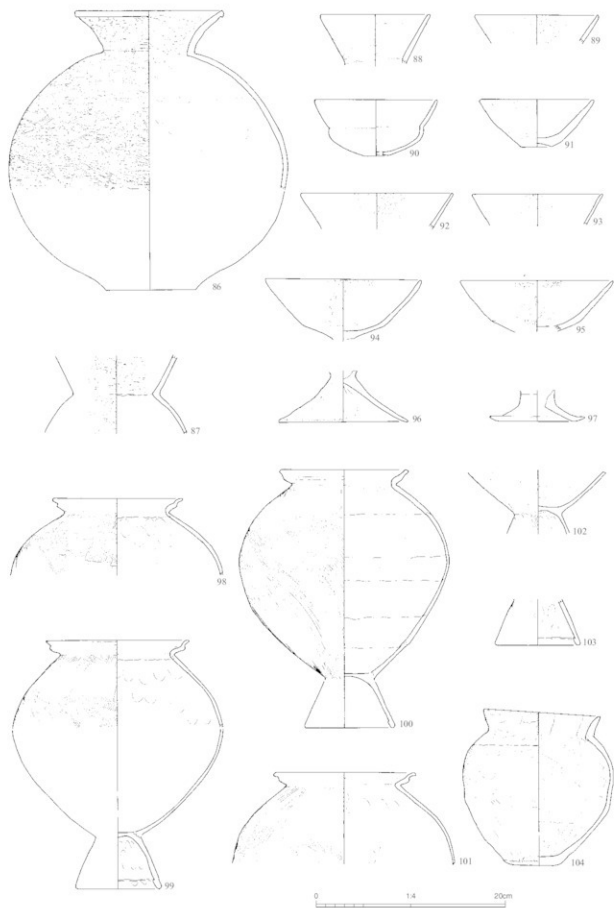


Fig22 SD201 出土遺物

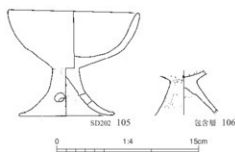


Fig.23 下層遺構出土遺物

れる。

以上、SD201から出土した遺物群は、古墳時代前期の土師器編年上に位置づけることができる一括資料と捉えられる。94・95といった高坏が屈折脚高坏と捉えることが妥当であるなら、元屋敷Ⅲ式（鈴木2002）に平行する遺物群とみてよい。近隣における同段階の一括資料としては、山の神遺跡1次調査SK236出土遺物（浜文協1989）や、山の神遺跡3次調査SD201上層出土遺物（静文研1997）などがあげられる。

SD202出土遺物（Fig.23） 105は、SD202から出土した土師器の高坏である。屈折脚高坏にみられる坏部形態に有稜高坏にみられる脚部形がつながる。SD201出土遺物と同様、4世紀中葉頃の遺物と捉えられるだろう。

下層包含層出土遺物（Fig.23） 106は、下層遺構検出面より下位の地層である基本層位8-2層（淡青灰色粘土層）から出土した遺物である。3世紀～4世紀頃の土師器の高坏と捉えられるが、遺存部分が小さいため、詳細な帰属時期は明らかにしえない。下層遺構検出面より下位に、水田が営まれていたと想定できるが、この水田の耕作土中に含まれる遺物と捉えられる。水田の造営時期は、古墳時代前期の中におさまるとみてよいだろう。

（4）小 結

下層遺構の調査は、ほぼ、4世紀中葉の溝SD201の確認作業に集約できる。SD201は、幅7.0m、深さ0.8mほどの規模で、小規模な自然流路（河川跡）と捉えられる。SD201から出土した遺物群は、古墳時代前期末葉の元屋敷Ⅲ式に平行する。この段階の資料は稀少であり、SD201の遺物群を編年上の基準資料として捉えることが可能である。

西畑屋遺跡をはじめ積志地区の沖積平野では、4世紀代の遺物を出土する遺跡は知られていない。しかし、SD201における土器の出土状態を考慮すると、近隣に4世紀代の居住域が広がっている可能性が高いとみられる。

下層遺構検出面より下の層位（基本層位8層）において、水田耕作土層が確認できたことも特筆できよう。水田の造営時期は不明確ながら、3世紀から4世紀（古墳時代前期）に求められる可能性が高く、従来、不明瞭であった積志地区における沖積地開発の起源を探る上で貴重な情報を提供した。

著に認められない。また、肩部のヨコハケは98にのみみられ、99～101にはみられない。肩部上面の左下がりハケメも、全体的に傾きが弱く、直立傾向が強い。98～101は、いずれもS字堯C類の最新相に位置づけることができる（赤塚1990）。なお、100や101はS字堯D類への移行形態を示す資料として注目できる。

104は「く」字状口縁の平底堯である。外面は粗いハケもしくは、イタナデが施され、内面にはケズリがみら

第3章 総括

西畑屋遺跡2次調査は、短い調査期間であったが、従来の認識から大きく進展させる数多くの成果を得ることができた。とくに、西畑屋遺跡において、これまで確認されていた7世紀から8世紀の遺構群に加え、5世紀と4世紀の2層にわたる遺構群を確認したことは特筆できるだろう。さいごに、報告の内容を時代順に要約するとともに、各項目について明らかにされた内容を総合し、今後の展望を示したい。

古墳時代前期 古墳時代前期（3世紀中葉～4世紀中葉）の遺構としては、最下層（基本層位8層）で確認できた水田と、下層遺構で紹介した自然流路SD201があげられる。水田の明確な帰属時期は不明確であるが、わずかに出土した土器からは、水田の造営開始が3世紀に遡る可能性も考えられる。積志地区における沖積地開発の発端を示す可能性がある。

自然流路SD201は、幅7.0m、深さ0.8mほどの規模である。出土遺物は、比較的豊富で、中には発泡した土塊が含まれていた。溝の中において、非常に高温で火が焚かれたことがうかがえる。また、SD201から出土した土器群は、古墳時代前期末葉（4世紀中葉）の元屋敷Ⅲ式段階（鈴木2002）に平行する。従来、希薄であったこの段階の基準資料として捉えることが可能である。

積志地区の東に隣接する笠井地区では、比較的発掘調査が多く実施されている。笠井地区における沖積平野の開発の始まりは、古墳時代前期の段階とみられ、現状では弥生時代に遡る遺構や遺物は確認されていない（浜文協2002）。今回、西畑屋遺跡で確認できた古墳時代前期の遺構は、積志地区における沖積地の開発開始期も古墳時代前期である可能性を示唆している。

古墳時代中期 中層遺構検出面において、古墳時代中期後葉（5世紀後葉）の遺構群を確認した。検出した遺構群の性格は不明確ながら、土抗や小穴など、遺構密度は高い。遺物の出土量や、遺構の状態から判断すると、調査地点は居住域であった可能性が考えられる。

遺構群の形成時期が5世紀後葉と、比較的限定的であることも留意したい。この時期の居住域は、個別分散的で、前後する時期の居住域も近くに存在するとみられる。

飛鳥時代～奈良時代 上層遺構検出面において、飛鳥時代中葉～奈良時代前葉（7世紀中葉～8世紀前葉）の小穴、土抗、窪地を検出した。また、基本層位3層において、この時代の土器集積SX02・03を確認した。これら古代の遺構は、西畑屋遺跡1次調査（浜文協1999）で確認した河川跡や土器集積と、層位的にも時期的にも平行関係にあり、古代の遺構群が一定の広がりをもつことが明確になった。

上層遺構から出土した遺物には、西畑屋遺跡1次調査で大量に出土したような土製模造品は少ない。しかし、Fig.12-12に示すような内面に把手がつく土師器は、1次調査出土品と共通する特殊な遺物と評価できる。また、土器集積SX02・03のあり方は、西畑屋1次調査の状況と類似しており、大量の土器廃棄場が近在している可能性が考えられる。

平安時代 今回の調査では、平安時代の遺構は確認できなかったが、基本層位3層において平安時代中葉（10世紀）の灰軸陶器が出土した。近隣に同時代の遺構群が展開している可能性が考えられる。

鎌倉時代～室町時代 鎌倉時代～室町時代の遺物は、今回の調査では確認できなかった。なお、西畑屋1次調査地や、東畑屋遺跡では、12～13世紀の遺構や遺物が確認されている。

戦国時代 戦国時代の遺構としては、上層遺構検出面で確認した井戸SE01と、SK04があげられる。SE01は、石組みの構造で、深さは3.0mほどである。出土遺物から、15世紀末葉～16世紀前半の遺構と捉えられる。

江戸時代以降 江戸時代の様相も明確ではない。ただし、水田耕作土は比較的厚く堆積しており、水田の造営が長期間にわたっていることは容易に想像できる。江戸時代のある段階には、調査地点は水田として利用され、その後、現代に至り、盛土による造成に至ると考えられる。

結語 以上、西畑屋遺跡2次調査の成果を示した。積志地区の沖積地における遺跡の発掘調査は、いまだ事例が少なく、今回実施した限定的な調査では、全体像を把握することは困難である。しかし、今回の調査結果から推定したように、近隣の笠井地区における集落の消長と類似している可能性が考えられる。今後も、近隣調査地における継続的な調査を通じて、土地利用の変遷が明らかになることを期待したい。

参考文献

- 赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『山の神遺跡』
（財）浜松市文化協会 1989『山の神遺跡』
（財）浜松市文化協会 2001『東畑屋遺跡』
（財）浜松市文化協会 1999『西畑屋遺跡1999』
（財）浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡』
鈴木一有 2002「古墳時代前期にかんする諸問題」『恒武西宮遺跡』（財）浜松市文化協会

図 版

PLATE





上層遺構検出状況（南西から）

PL.2



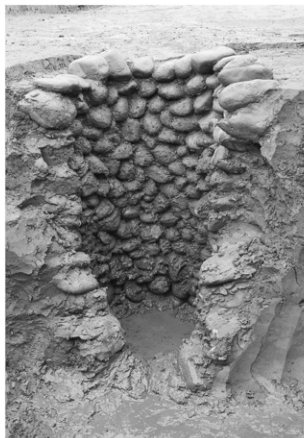
1 上層遺構（北西から）



2 上層遺構（北東から）



1 SE01 上面 (北東から)



2 SE01 断面 (西から)



3 SE01 最下層 (西から)



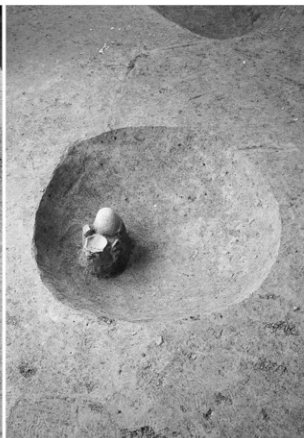
1 SP13 遺物出土状況 (南西から)



2 SK04 遺物出土状況 (北東から)



3 SK02 遺物出土状況 (西から)



4 SK05 遺物出土状況 (南から)



1 中層遺構（南西から）



2 SK102・103 遺物出土状況（南東から）



3 SK106 遺物出土状況（南東から）



下層遺構 SD201 (南西から)



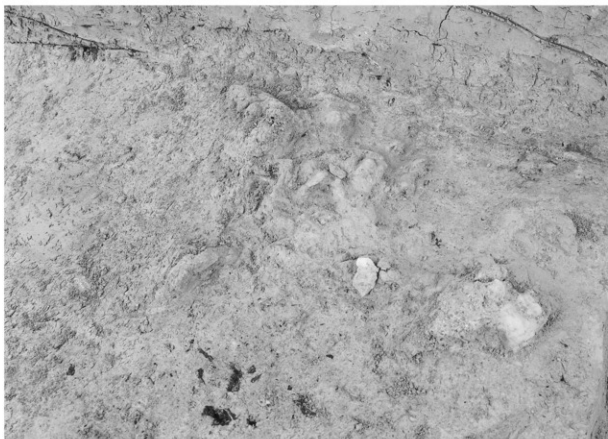
1 SD201 遺物出土状況 (南西から)



2 SD201 遺物出土状況 (東から)



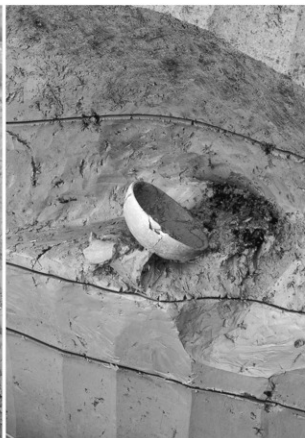
3 SD201 遺物出土状況 (北東から)



1 SD201 発泡土塊出土状況 (南から)



2 SD201 発泡土塊出土状況 (南東から)



3 SD202 遺物出土状況 (西から)



SD201 主要出土遺物



1 上層遺構出土遺物



2 中層遺構出土遺物





報告書抄録

書名(ふりがな)	西畑屋遺跡2次 (にしはたやいせき 2じ)							
編著者名	鈴木一有							
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当 (浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒430-0946 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	(財) 浜松市文化振興財団 〒430-7790 浜松市中区板屋町111番地の1 TEL (053) 451-1113							
発行年月日	2008年9月30日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしはたや 西畑屋遺跡	静岡県 浜松市東区 有玉南町	22202	02- 01- 36	137度 44分 55秒	34度 45分 30秒	2007年 11月14日 ～ 12月10日	240 ㎡	宅地造成 に先立つ 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺物		特記事項		
西畑屋	集落	古墳時代 奈良時代 戦国時代		土師器 須恵器		西畑屋遺跡において、古墳時代前期・中期の遺構を初めて確認		

西畑屋遺跡2次

2008年9月30日

編集機関 浜松市教育委員会

発行機関 財団法人 浜松市文化振興財団

印刷 中部印刷株式会社

Nishihataya Site

—The 2nd excavation report—



September, 2008

Hamamatsu Cultural Foundation